



比較文明の方法試論

須田 信 英*

一昨年(2007)の4月、国立民族学博物館で、「比較文明の方法論の研究」という、考えようによっては途方もなく大きいテーマの共同研究が発足した。メンバーは、博物館側からさまざまな分野の専門家が13人、そうして博物館外からは哲学、社会学、経済学、国際関係論、科学技術史など、これまた多方面の専門家が11人参加している。その中に工学畑から、基礎工学部生物工学科の教授を長年務められ、最近東京大学へ移られた鈴木良次先生と、それから私とが紛れ込んでいる。

比較文明という概念は、西欧中心的史観の否定ないし崩壊から生まれたとあってよいだろう。世界を文明と未開の二元論で捉え、西欧近代文明だけが文明であって、それに近づくこと、つまり西欧化、近代化が未開から文明への進歩の道筋であるという考え方がまかり通ったのはそう古い話ではない。西欧自身そう自惚れていたし、非西欧世界の多くが、圧倒的な機械文明、特に軍事力の脅威の前に、西欧を規範としそれに追いつくことを至上目的としたのは、明治以来のわが国を振り返ってみるだけでも明かである。

こういう西欧中心主義を超えて、地球上のさまざまな文明の価値を平等に認め、その相対的な比較をしようという発想は、1918年から1923年にかけて刊行された、シュペングラーの「西欧の没落」に始まり、歴史家トインビーの研究に受け継がれているという。考えてみれば、西欧中心主義の批判は西欧以外から、例えば日本から主張されてもおかしくなかったはずである。それなのに、わが国では比較文明を論じる際にも、シュペングラーがこういった、トインビー

がああいったという祖述が多く、いってみれば西欧中心的史観の批判においても西欧追随をしてきたのではなからうか。

その批判が西欧自身の中から出てきたということは、ある意味では西欧文明の健全性のあらわれといえるが、やはりそこには西欧の視点からみた偏りがあるだろうし、ことによっては西欧の自己弁護、負け惜しみめいた点もあるかもしれない。西欧の目にとらわれない発言があってもよいのではないか。

そういう発言の一つで、先鞭をつけたといってもおそらく間違いでないと思われるのが、現在民族学博物館の館長である梅棹忠夫先生の1957年に出た論文「文明の生態史観」である。「トインビーという人がやってきた。歴史家として、たいへんえらい人だということだ」という書き出しにも、梅棹先生の気負いが感じられる。彼の著書を読んで、「わたしは、トインビー説に感心はしたけれど、改宗はしなかった」。

西欧の視点にとらわれないといっても、その代わりに日本の目だけでみた、日本中心史観になってしまったのでは何もならない。なるべくなら自然科学に近い客観性と普遍性をもったアプローチが望ましい。その点を梅棹先生は生態学とのアナロジーに求められたようである。いろいろな生物が生活共同体を構成しており、その生活様式は環境によって異なる、さらに環境の変化にともなって生活様式が変化して行く。それと同様に、文明は人間の共同体の生活様式であり、その変化の歴史であると考えられるわけである。これは多分にシステムダイナミクスの発想を含んだ考え方である。

実際、1980年に梅棹先生の還暦を記念して開かれたシンポジウム「文明学の構築のために」の基調講演で、機械や建築物などの施設と政治や経済などの制度とを併せた人間をとりまく有

*須田信英(Nobuhide SUDA), 大阪大学基礎工学部 制御工学科, 教授, 工学博士, 制御工学

形無形の人工物のすべてを一括して、人間の生活を成り立たせている「装置群」と捉え、人間と装置とが構成するシステムを文明と呼んでおられる。そうして、人間・自然系としての生態系から人間・装置系としての文明系への移行が人間の進化であり、その移行は連続的であって現代文明といえども多分に生態系的要素を残しているとされる。これを受けて、シンポジウムのパネラの1人で、今回の共同研究の代表者でもある民族学博物館の杉田繁治教授は、「文明のシステム工学」という講演をされている。ここではシステムとしての文明の相互比較のための尺度として、人工度、適応度、冗長度、複雑度、速度の5つが提唱されている。

こういう背景を考えると、民族学博物館の中に比較文明の方法論についての共同研究グループが生まれたのは、自然の成りゆきであろう。そこに工学畑の者が加えられた理由を、私は次のように憶測している。第一は、科学技術文明とか情報化文明と言われるように、文明、梅棹先生のいう人間・装置系がもはや技術を抜きには語れなくなったという、文明の内容に関わる一面である。第二は、上述のように、文明の比較に尺度を設定したい、できればそれを基盤にコンピュータ解析をしたいという発想があり、比較手段としての工学、技術に関心というか、期待めいたものがあつたようである。第三には、文明をシステムと捉えるならば、当然工学におけるシステム論との対比ないしはそこから示唆が期待される。

研究会は大体2カ月に1回をめぐりに開催され、輪番で話題を提起しそれをめぐって討論をする。私などが上記の期待に全面的に応えることは到底できないが、我々にとって文科系の人の発想が新鮮であると同様に、先方にとっても工学系の考え方はやはり何かの示唆を与えるのではなからうか。今後、機会あるごとにこういう場にいろいろな専門の工学者が参加して、積極的に発言するべきだと思う。

順番が回ってきて、話題提起を求められたとき、私は次のような試論を提出した。

比較文明の「比較」ということについて、それまでの会合では、尺度論が盛んであつた。しかし人工度とか冗長度とかいう尺度は、いずれも納得のいくものではなかつた。公共目的の大

建築物が作られるのが文明の始まりだという説もあつたが、座標原点は与えても目盛りを示してくれない。尺度の代わりにどちらが文明度が高いかという不等式を提示した人もあつたが、一夫多妻制<一夫一婦制 という不等式には文化人類学者から異論が出るなど、これも全面的な納得は得られなかつた。結局のところ、尺度論は未開から文明へという、一筋道の進歩観の残骸を引きずっているのではあるまいか。比較とは類型の識別、パターンの識別だと考える方がよくはないか。類型の識別は技術的にもむずかしい課題であるのは勿論だが、その工夫をする方が尺度の設定を目指すよりは、まだしも実りある結果につながりそうに思われる。

いうまでもなく、システムとは多数の要素の集合体で、要素間の相互作用によってさまざまな機能を発揮し、さまざまな状態を推移するものである。梅棹先生が文明はシステムであるといわれるとき、その構成要素は装置群であり、文明に属する人間は全員が一束にまとめられて各種の装置と並ぶ一要素とみなされるようである。そうではなくて、文明とは人間集団における構成員の相互作用の態様である。つまりシステムの構成要素は人間であり、それらの要素間の相互作用のスタイルが文明であると考え方が、私にはむしろ適切と思われる。こう考えると、文明の区分は、相対比較的にみて、相互作用の密接な人間集団ということになる、日本文明、アメリカ文明といった地域性や、イスラム文明などの宗教は、同じ地域に住んでいれば、同じ宗教を信じていれば、密接な相互作用を生じやすいという、影響要因とみなされる。

相互作用の態様、ありさまをどういう視点から捉えられそうか。これについて六つの項目を提案した。構成員の分化と機能、情報の産出・流通・蓄積、価値の産出・流通・蓄積、構成員を結びつける力、感性と価値観の共有、歴史的経過である。それぞれについて多少の考察を述べたが、ここでは省略する。

この発表に対して、格別大きな反響があつたとはいえないが、一つの面白い見方とは思ってもらえたようである。少なくとも尺度論はその後あまり表に出てこなくなつた。私自身はこの説に愛着をもっており、さらに考察を続けたいと思つている。